樂し氣に歩めり。
然れども我等の懐には
一塊のパンだに無かりき。
などて我等彼を伴ひ歸らざりし、
おゝ、月下に泣く小さき黑き影よ。

そはやがて正午間近き時なりし。
余は昨夜の友を訪ねて、
先に作りし一篇の詩を示せるに、
彼の犬やそも如何にせしならんと、
敢て又多くを語らず、
秋光を浴びて我等默しぬ。

其處にはたゞ嬰兒のみ置かれしまゝに、
無心の手をば擴げて、
遠近にある何をか摑まんとせり。
彼がやうやうにして手にとりしは
一冊の婦人雜誌
『無實の罪に泣く』てう題の下に、
しるされし記事の
我れはいつか之に讀みふけりて、
同情の念禁ずる不能
此等——如何にしてか其苦しみに
打ち勝たんすべもがなと
我身にかけて思ひ及べり。

斷崖

斷崖！　斷崖！　斷崖！
おゝ、再び起つ能はざる斷崖。
汝は血を流しぬ。
幾度か生命を捨てんとしぬ。

あゝ、寂寥襲ふ暗黑の谷、
いついつ暴風雨の來らんも計り難きに
登れ！　心締めて懸命に……

峰にかゝる暗雲。
忽ちにして雨……
雨、いよゝ、降りかゝるなり。

捨てゝゆけ私共を

捨てゝゆけ！　私共を……
其處にはどんな男でも待つて居やう。
其男――何者か
彼、若し、僕と同じ精神ならば、
彼女は直に拒まるゝであらう。
……そうではないか……

そうでなくば女蕩しの男だ。
金があつて、見掛け堂々と、
而も社會的に地位ある奴だ。
其處には同じ墮落に喜び悲しむ
幾多の女性があらう。
惡疾に感染し、惡運に泣き、
晝夜に狂ふ地獄宛然の世界——
……今僕を捨て走り去る彼女こそは、
やがて其男に迫られて
親兄弟をも捨つるであらう。
さなくば弄ばれて
あげくの果に捨てられて了ふか、

あらぬ生涯に葬らるゝか、
時來つて又爭の生ずれば、
爲に其男に殺されもしやう。
……それ見た事かと、其時僕が、
彼女をはじめ、御母さん、皆さん方に、
快い氣持で居られると思ふか、
愛は眞劍生命懸だ！
おゝ、私の妻、私共を捨てゆく女、
けれども私はまだ愛さうとする。
今こそ各々が心を合せて、
人々はもつと眞劍になり、
情理をつくし、事を穿ち、

眞實をして勝たしめねばならぬ。
私は火花散る戰の眞先に立つ

愛はいらぬ

愛、愛は最早、いらぬ。
涙、涙は最早、流さぬ。

苦痛、おゝ、其(それ)は最早や舐めつくした。
悲哀、その、ドン底も早や見きはめた。
虚無、あゝ、明るい。明るい。
おゝ、俺は、其處から『眞(しん)』を作り出す。

往けよ

往けよ、彼女、健康に何處(どこ)までも
理解、それは唯其處にのみあるばかりだ。
おゝ、彼女往けよ、健やかに往け、
此日、此時、日輪狂ほしくも廻(めぐ)れる。
たゞ、時刼と運命——
そればかり力强く我等の間には……

坊やよ

妻にも捨てられてしまつた。
咳が出て又肺尖だぞ！

さうだ……
やがて、御父さん、御母さんにも、
おなくなり成さるんだ。

坊やよ……
可愛いゝ、可愛いゝ、R坊ちやんよ！
どうぞしばらく御泣きでないよ。
御乳上げやう、御乳おのみ。

あゝ、もう、虫も鳴かなくなつて、
月寒い夜更の街を、あの女按摩の聲は、
どこまで流れてゆくんだらう。

苦闘し歩む

我にはこの日頃顔合する人の
悉く苦悶の種とはなりぬ。
朝に省線電車の車中に讀み更ける
『獄篇』は、夜半の歸路に宛然辿る道なり。
あゝ、吾が影一とつ
暗き公園の入口にさしかゝれば、

やがてグランドを取り圍める淋しき樹立――
枯葉をふるひ、皺がれし風の、
我が胸底までも吹き卷くる物寂しさ――
今日は『紙上』に有爲なる帝大哲學科の青年
明年大學教授にも成らんとして
破婚と失戀の爲に心狂ひ、
約婚者の父母を殺し、
自らも縊れし悲慘事の、
吾は又心傾けし妻に
愛兒と共に見捨てられつ、
而も、十字架の故に、怨みもならず、
反つて彼女、並に、北海道の母、

其兄弟姉妹、親族等の平安を祈りつ、
唇を嚙み、拳を握り、
全身ふるひわなゝかせ
「H、自奮せよ！」と
苦闘し歩みつゞくるなり。
おゝ、吾れ、斯かる暗黑の淵に、
苦しみ、惱み、悶ゆる時、
ふと眼もはるに御空仰げば、
折から暗澹たる雲を破つて
星影のさやにさし輝やくを見る。

千載の一遇

我れ幾度となく孤心の悲哀を痛感しぬ。
病み、裏切られ、又、見捨てられぬ。
然れど我が内なる靈の
白熱化しつ燃え猛る所に、
我れは我が生命の力強きを感ず。
何者にも屈する事なく永遠に輝やく魂――
おゝ、知れ！　汝、今、實に、
千載一遇の機に臨めるを……

進め生命を捨てゝ

進まんか救の榮冠
退けば永遠暗黑の死
進め！　生命を捨てゝ……

今に

思ひ知れ今に……
恐ろしい時が來るぞ！
見よ、此處、十年だ。
夜々、しのびしのび、冷やかなる手が、
枕から首、首から襟、襟から胸、
胸底から魂へと觸つてゆくぞ！
御前等、罪に罪を重ねて、
再び浮ぶ瀬もない
淵深く死んでしまふから……
其時には最早、人間の言葉、思ひなどで、

通じやうはずがなく
恁麼(どんな)にもがいたにしろ
助けられやうにもないからして……

僕は貧しいんだ。
けれども不義理や不人情など、
敢てした覺えはない。
何處へ行つても可愛ゆがられ、
又敬はれて居る自分だ

いたいけな坊やと共に
淋しくはあれど、

心正しきを何よりとして、
燃え立つ心をふりそゝいでは、
日々太陽と共にいそしんで居る。
己れから虚榮の爲に、眼眩み、
悪魔もなし得ぬ今日の仕業に、
御前等！　この僕を、刑事部屋から、
牢獄へと繋ぐつもりか。
何とでもしろ、何でもいゝさ。
僕は、僕自身の、自由の精神に、
終始力強く踏みこたへ、
戰つてゆくんだ。

僕はどんな目に會はうと、
會はされやうと、
假にも、天を怨み、人を呪ひ、
神佛が無いなどゝ、
そんな、見苦しい、耻晒しは、大嫌ひだ。
どんなにしたつてこの尊い自身から、
潔い何物をも奪はれはしない。
益々、練りに練り、鍛へ上げ、磨き出して。
眞實こもれるものとしなければやまない。
やがては、五年たち、十年たち、

御身等は如何になりゆくか知らないが、
僕は益々輝やき亘る權化となつて、
遂には人生不朽の大精神、
大事業とするんだ。

曾ては御母様と御呼び申上げた
こゝにて呼ぶ御方から、
今に猶いとしい妹と思ふ、Sちやんまで、
一日の働きを終つて、眠りの床に着く時に
其身安かれと祈つては居る。

御身等胸に手をあてゝ

おゝ、よく考へて見るがいゝ、
今に尙深く忘れ得ぬ事があらう。
御身等、御父様の御墓詣りに往つた時
其處にてもよく敎へらるゝであらう。
宜しく申上げてくれ。
僕は必ず立派になつて、其時には、
墓參にも上りませうから……と

聲限り歌へ

惡の力、
今は熄(や)みぬ。
我を煩はす何者もなし。

いざ！
腕をのべ、胸を張り、足を踏み、
聲限り歌へ！

高く、高く、
流れ出(い)づる生命のまゝに……

夜更けの街に

今日も亦終電車で横濱へ戻りました。
うつうつ一と眠りして、
櫻木町で搖り起されると、
又本牧行の赤電車で元町へと急ぎます。
其處からは五丁——
家路を指してトボトボ……と
兩側の家(うち)は一とつ殘らず寢てしまい
人影とては更にない。

ナァー、ベャー、キ、うどん！

さびた一と聲
かすかに街を呼び起こす。
其聲、消ゆれば、猶寒い。
電燈ばかりがボツネンと、
獨りボツチのお月さん。

あゝ、誰もない、誰もない、
御前と影があるばかり。
疲れに疲れ、冷えに冷え、
可弱い身體遲くまで

使ひ切らしてしまふんか、
御前の心淋しいね。

淋しい胸に、何思ふ、
思ひ迫れば血の涙、
ハラ、ハラ、熱い一と雫。
心切なく、胸痛い。
耐へ切れなくなる時に、
魂——犇と搔い抱いて、
思はず其處に立停まる。

あゝ、誰もない、誰もない、

誰も見てなど居はしない、
大路に立つて泣きましょね。
お泣き、お泣き、泣くがいゝ、
泣けば慰む一人して、
天地の胸に泣きましよね。

あゝ、人の世、
何故かこんなに辛いんか、
淋しい世界、悲しい世界、
父さん、母さん、R坊ちゃん。
あゝ、もう何んにも思ふまい。
身體痛めてなるもんか、

さあ、もう、鳥渡、急ぎませう。
私は宿へ、月雲に、
いたくも夜は更けにける。

ねえ、誰か來ないの

愛、愛は其處ら中にころがつて居る。
實に、彼處此處に、ゴロゴロして居る。
どれも、これも、皆んな破れ障子に、
カタコト秋風が音立てゝ居る。
おゝ、その秋風が……

愛、愛は又到る所で、
全く満足して、晝寢をしてゐる。
おゝ、居眠るに最もよい春風が……
おゝ、その春風が……

あゝ、
是は一體どうした事なんだらう。
そも、この私に坊や……
見れば、あゝ、父さんも　母さんも、
又、妹も……

ねえ、誰か來ないの！

たつた一人でいゝから、
ねえ、誰か來ないの！

靜かなる渚に

かくも靜かなる渚のほとり
幾世うるはしき花の
咲き又萎みし物語りやありつらん。

げに我が心の花も
時ありてか開きしなれど
哀れ實も結ばずして萎みしなるを……

人よ、濱の松風にして
今に變らぬ音色(ひゞき)あるを
痛みたまへ。

再び浪白き豐濱村に到りて

女性に

人生に對し無限の熱愛をこめて、
天をも焦す焔の意氣に、
困苦に微笑し、悲痛に嬉戲し、
萬物其中に融然として、

耀やくばかりの光を放ち、
嚠喨鳴り響く希望の喇叭、
轟きの胸、高鳴るリズム、
肅々たる愛の進擊——
おゝ、女性たるの喜びに勇み立つ
婦人は居ないか……

御身等女性よ！
無爲にして過ぎ去るがまゝに、
我が眼前に現はるゝをやめよ。
我が眼底には力强きものゝ外、
何ものも映らず。

おゝ、世を擧げて
自らのものとし思ふ、美はしき女性よ！
汝が驕れる其姿に、
咲き亂るゝ胸なるは何ぞや。

今し汝が誇らはしげに、
おゝ、勝ち告ぐる歌聲のもと、
尊き女神の魂にかゝる、
いとも値高き寶玉の胸飾り、
生命の眞珠——
君が眞に萬人に捧ぐる
天よりの惠みは……

げに我等が慕ふ谷間の白百合、
一輪氣高き魂に匂ふ、乙女心——
あゝ、見はるかす、
棘の赤薔薇、妖しの朱薔薇。
今は物凄き血潮に狂ひて、
此處には唯眞白く塗られたる墓ばかり、
其の成る果てを物語りつゝあり。

汝ならず、汝ならず、
あゝ、我が求むる者よ！
汝は遂に來らざるか、

來り見る能はざるか。

戀、焔々として天地を燬きつくし、
我れ我神に向つて叫ぶ、
やむ事なきこの思ひを胸にして
あゝ、我れ捧げんの君もなきか……と。

運命は實に深く刻む

運命は實に深く刻む。
ありつたけの血でもつて、
ハートの中へ只一字、
『死』と鮮やかに印します。
眞一文字に人生を……

自暴自棄

私はもう自暴自棄になりました。
何でもする、何でも出來ます。
人生とは愛する爲に生命を隕す事。
大きく強い波紋を描いて……

捨鉢の人生

酒！
女！
自己破滅のあらゆる手段、
この一擧に捨鉢の人生は變はる。

よしッ！
やれッ！
男らしく一切をたゝきつけろ、
グント『神』にぶつかってゆく……

淨火

何ものも我れに近づかしめず。
我れは焔々燃ゆる焔なり。

おゝ、我れ燃えに燃えて、
焦るゝ神に見えんまで、

靈よ、肉よ、困苦悲痛に、
血潮栄ゆる火花を散らせ！

夕陽に賦す

驀地に丘へ馳け上れ、驀地に……
太陽は沈むんだ。
太陽は沈むんだ。
早く、早く、頂上に立つて、
其の刻々に移りゆく姿をば見よ！

あゝ、何といふ力強い生命の息なんだ。
クラクラに燃えて、
其中にゆつたりと、
自ら沈む、自ら沈む。

總てのものに全靈を捧げ、
其氣高さに何ものもなく、
悠々沈默にかへる。沈默にかへる。
太陽よ、太陽よ、太陽よ、
我が魂の太陽よ！

過ぎし二千年の昔を
ナザレの村に、ユダヤの野に、
ヨルダンのほとり、
レバノンの雪に、カンランの丘に、
眩ゆき光とさし昇りては、
常暗を照らし、憂き波を覆へし、

叫び宛然眞紅となりて、
地を悉く血潮に染めぬ。

嗚呼、感激の焰我れに燃えて、
涙のほかに綴らんの辭なし。
綴らんの辭なし。

君よ、君よ、
如何なれば如斯き御姿なるぞ！
壯嚴なる夕陽に眺め入りて
嗚呼、我れ戀ふる心がまゝに……

戀愛篇

續四篇

人生を通してたゞ一とつ生くる道
生命(いのち)をそゝぎ出(だ)して其源を極むる
嬉しきはなべて大いなる靈(れい)に
我れもまた包まれてありしを

戀愛篇及續篇の上に

噴火山

年餘の歳月は
瞬くながれた。

彼女等の今
如何になりしぞ……

知るも、
知らぬも、

此處に噴火山の

輝やくを見よ！

おゝ、忘るな、
思へ、日！

汝が名を千載
青史にとゞめよ。

幾千年、幾萬年、
不滅の焔に、
血と火永劫の

天を焦せよ！

獨り敢然として進み往け

獨り敢然として進みゆけ、
靈(れい)を輝やかす爲には一切の幸福も滿足も、
天惠も失つて顧るなかれ。

予、病魔に試らるゝ七年、半は聾者(ろうしや)――
愛には血も涙も流し盡したるに
我心には飽までもやまぬ。

おゝ、此世のすべての
苦しみと、悲しみとが、
絶えずよく自他を育(はぐゝ)みつゝあるを知る。

飛行機に寄す

たゞ快翔を碧落に
恣が儘に誇らなん。
爆音、高く、又高く、
天外いよゝ進みゆく。

下界は夢か斷雲の
濛漠、漠々、あてどなく
迷ふが性質(さが)に落命の
陰府(よみ)にか更に奈落にか。

我等がたとへ過つも
綠が丘に抱かれなん。
飾らば飾れ雄々しくも
唐紅の血潮にぞ！

大地の胸を離れなば
大虛の胸に躍らなん。
奔放、絢爛、意のまゝに
大日輪のその如く……

綠が丘――墓地なり

諸共に愛の花を咲かせませう

おゝ、私、恁麼に賤しめられ、
恥しめられても、人間が好きだ。
どうして人類が御互を
其麼にもしなければならんものとは
未だ曾て私自身に於て
考へられなかつたから……
そうです。靈魂が天國に憧憬れる先に、
私は悲哀のドン底に於て、
どんなに此身を愛しんだ事だらう。

お、私の父さん。私の母さん。
世のすべての人々に『愛』、
之にもまさるものが
一體どこにあらう。
愛の花は神のものか？
昔乍らのエデンの園にか……
否、私達のも本當に
高く潔からねばならぬ。
兄弟よ！　姉妹よ！　カルバリの丘に
苦しみ通して咲かせし
彼の故に、御互に……
さあ！　開かうではありませんか。

警世篇

白晝の幽靈

ヒラヒラと輝やく衣、
眩ゆき晝——
人といふ人の悉く働らく時、
なまめかしくも游ぐ
銀座に晝の幽靈の影。

Y裁判所にて　A

今日も亦民刑事部書記室の一隅――
我等營々として、吸々ペンを走らす所、
勿驚、年俸僅か二百四拾圓。
嗚呼、裁判長、判事、檢事。
彼等、又、何する者ぞ！
我が被告は正に本能寺に在り
いざ來り起て汝人道の辯護士！

藥鑵頭　B

其腕に少女を抱き、
莫の煙りを毒氣と吐き、
汚き慾の接吻をなす。
受附係の藥鑵頭！
此處は神聖なるべき裁判所内、
民刑事部書記室なるぞ、
汝、衆人の前に耻辱と對面とを知れ！
何事ぞ！　其人前のみをつくる、
威嚴らしき虚僞の様は……

餘りに簡單な人

C

大切そうに小切手を握つて、
君はニコニコと椅子に凭りしが
やがてイソイソと出でゆきにけり。
何處へかゆくその笑ひ顏——
おゝ、其聲は……
さて、何時までか。
人よ、人よ、人よ、
おゝ、餘りに簡單な人よ！

寢坊助齒醫者

寢坊助齒醫者目を覺せ、
患者まちせるグズノロ奴！
『起きたばかりだ二時間……を』
二時間？　貴樣！　何をする。
『顏を洗つて　飯食つて、
御髭を剃つて、茶を飲んで……』
此の木偶、間が抜け、飛んでもねえ——
ハイカラがつて偉張りやがる。

先生――妙になつてくぞ！

莨の煙に輪をかけて、
天井むいて吹上げろ。
貴様の命飛んでくぞ！

さてもお髭の殿様よ、貴様よ！　俺が朝早く、
約束ふんで來る時に、
何だと己れ二時間は……

ボラン、ブンブラ、バツチントン。

シウ、ガリガリ、五拾圓。
不眠不休で儲けます。

少したまると急に又、
夫れも面倒一足飛び、
Y・M、ドクトル、デンチスト、

看板高し、値も高し、
氣位馬鹿に高きかな、
嗚呼、齒醫者様、齒醫者様、
末恐ろしの齒醫者様。

飛だ御稽古

下の主人の馬鹿奴郎！
三階の先生の意氣地なし。
その言ふ事が振つてる。
稽古が濟んだら店に居ず、
サツサと歸つて呉れ給へ。
買ふこと以外一刻も、
店じや眞平御免です。

然うか、成程、難有う。
トンチンカンの糞親父、

我利我利盲者、糞盲者、
御前一體幾つだぇ、
全く皆なで吃驚す。

我々先生の弟子達は、
花の盛りの二十代。
子供さんぢや御座らんし、
物事實際よくわかる。
今にピアノの一臺や、
二、三ダースのヴァイオリン、
ギーター位わけもなく、
買はん出世前の人。

一と稽古して降りて來て、
一寸話すが何惡い。
袖すり合ふも何とやら、
菓子でも買つて馳走しろ。

目玉の開くほど俺達の、
顏をよくよく覺えとけ。
中にや五年、十年に、
天下を乘取る大將が、
一人、二人居るんだぞ！
げにや五年、十年に、

天下を乘取る大將が、
二人、三人は居るからねえ——

世界的傳道者S・Kに

世界的大傳道者S・K、
大正十二年三月上旬、
千葉縣夷隅郡勝浦町に來て傳道して曰く。
『君達そんなに偉がつて居ないで、
もつとこちらへ寄り給へ！』
スピリチアル、スピリチアル、
皆なで『アーメン』と。

そして無暗と握手する。
それから今度は献金だ！
『僕はこうして世界中
席あたゝまる暇もなく、
福音宣傳に專らだ。
おゝ、參會の諸君たち、
僕の爲にも應分な、
ポケツト、マネーを出し給へ。』
一等旅館に、二等汽車、
權兵衛、田吾作、濱漁士、
正直一途と見下したか。

おゝ、奇怪千萬。夜更けの道——
……家あらば馳込み度い
この激しき憂き惱み……
『先生！　妾、そんな事なされては困ります。
妾——そんな汚いものなど
決して求めては居りません。
神樣が見て御許しなさいますか。如何！』
「エ、それはそうです。」
『では……左樣なら』
おゝ、K！

汝、僞りの豫言者。
この世界的大惡魔。
勝浦豐濱の靈は寢てやせん、見よ！

復活節に

今も尙人類は暗い。
墮落のドン底に、瀆れのまゝに、
噫、又、此處に二千年ぞ！
主をわたせる者の罪
永久に消えやらんかな。
二十世紀を逆にして
其文明をも神に戻せ。
もどれる世に何をか期待まん。
我等が身も十字架に磔付けて了へ！
力ある眞の復活はそこだ！

T教會員に

訴訟したか本當に、
訴訟しろ、もつと、
教會を、貴樣を、クリストを、
殺して以て十字架となれ。

惡魔となつて

おい、人間共、
然しうまくやつて呉れたな。
うむ！　すつかり
俺の手に乘せられてしまつた。
さあ！　之からはもう
決して心配などさせないから、
さあ！　さつさと又喧嘩しろ。
こん畜生！　四ツ足！　極道奴！
こゝでは自由だ、
さあ！　うんとやれ　どうしたッ！

皆な眠れ

皆な眠れ。說教なんか聞くな。
牧師は一體何を話してゐるんだッ！
折々は頭を搔き、又、顏をなでる。
聲にさつぱり力がこもらぬ。
糞！　何だか薄ッぺらな話を聞いた。

もつと惰眠を貪れ

もつと惰眠を貪れ。
もつと假面を被れ。
眞ッ晝間、戸を閉ぢて、暗がりに居ろ！
決して出るな！
貴樣は最早人間たる資格がないから。

宗教臭きは大嫌だ

宗教臭きは大嫌だッ！
飽迄も人情の本義により、
無殘にも敗れし人心の上に、
熱火の如き情熱をそゝぎ、
我れナザレ人の足跡を踐まん。

世の不義と戰つて

世の不義と戰つて、
我が靈の悉く勝ち續けんまで、
我れは永遠に滿足する能はず。
靈は飽迄も尊嚴なり。
身は瞬時も嚴肅なり。
壯嚴なる人生は、
斷じて名譽黃金の奴隷たる能はず。

何も案ずるものはない

何も案ずるものはない。
夢中になつて火中に飛び、
火の車を廻轉するのが、
其が僕の人生だ。

死線を突破して

年經て遂に肉體は亡ぶ。
されど我等は死せず。
誰か人生を虚無滅落となす。
國民をして雄偉なる人格を
建設せしめよ！
死線を突破して
『生』を彼岸に展回せよ。

我等の本領

死を賭しても乗越えて進め！
人生は無限への進展である。
我等の本領は輝やく魂——
其處に益々高く、深く、眞實にして……

悲痛、絶望

悲痛、絶望、墮落、暗黑、
夢、現、夢、現、
愛、光、涙、祈、
我れ『人』となるまでには……

海角の斷崖に臨んで

下には奔騰する激浪
上には蒼穹――
汝もし人たらば
この絶壁の如くに……

激浪に詠ず

岩を嚙み、砂を洗ひ、
己(おのれ)をうちつけて
總てをきよめよ。
障害とは困難なりとの
言ひならず、弱き心よ！
岩を嚙み、砂を洗ひ、
人生潔(いさぎよ)く玉と碎けん。

端的に打出せ

感情に捕へられず
極めて冷靜——
感激に充ちて
悉く熱烈。
眞晝間、眞裸、眞人間、
爾の生命を端的に打出せ！

ア、立派な紳士

悠然として彼は今坐席を占める。
ア、、立派な紳士。
其金樣眼鏡。其金側時計。
オ、、又、其新調せるレインコート。
或は柔らかに握る輕らかな洋傘。
『ヤアー、今晩は……』
「ドチラヘ！」
『イヤ、何、鳥渡。』
何だいけすかん。

この見事な借金持。
屁でも嗅げ！
糞でも喰へ！

暗き呼聲

時は二時、明るき晝。
用足して品川の宿を來れば、
顏いたく赭らぎし壯年の人
彼方よりぞ流れ來れる。
おゝ、そが、實に恐ろしき淫慾に
燃え立てる眼——
あゝ、情炎……ほむら、
ほむらは狂ふやがての頽癈——
『入らつしやい！』と
物影より誘ふ暗き呼聲よ！

歡樂の悲哀

歡樂のあと哀愁をそゝる。
哀愁にそゝられて又歡樂にふける。
男女よ！
私達(わたしたち)は何の爲にでしたでせうねえ——

アイスクリームとビール

暑いぞ！　アイスクリーム。
おゝ、俺は溶けてしまつた。

涼しいぞ、ビール。
おや、おや、俺は泡になつちやつた。

夏の日カラカラと太陽(ひ)が廻り。
天邊(てんぺん)でお月さんが笑つてます。

主を仰がんの心よ

キクリ！
病みたる肺の所をば今鋭きメスの一閃。
キリツ！
尙鋭きメスの一閃——

空しく息絶えて硬くのび
其處に横たはる身かな。
危くして秒一秒、おゝ、更に又……
ズブリ！

そが儘にまかせ給へる御生命なれば、
君が肋さし貫ぬかれて紅の御姿——
然らば我等主を望み仰がんの心よ……

おゝ、我が日消ゆるよ

おゝ、我が日消ゆるよ。
やがてやまん。
衰へし鼓動——あゝ。
愕然として　我面(わがおも)しろし。
又、何をか考ふ。
冷やかなる風、暗く觸るゝ指。
メネ、テケル。メネ、テケル。

あゝ、すべて終りぬ。
人、地位、名譽、富、はた願ひ。
然れど今耀(かゞ)やくは死。

聞ゆるは彼の哀しみの聲か？
墓場よ！
如何に堪え難き魂のもがきぞ。
おゝ、速やかに柩をはこべ！

おゝ、及びなき悲しき胸よ
悶ゆるが生命か……
今にして知る

人の世の如何ばかり安かりしかを……

怨、呪、悔はた歎き——

罪！

業火正に燄々たり。

思ふ我れ生きて靜かなる時、

人の世深く祈り咽びて、

しかく又悲しみて可ならずや。

嵐に賦す

青空を消せ。

光をブン流せ。

風よ、雲よ、濁流の如く

愈々近く歡呼を擧げて

驀地に地上めがけて押し迫れ。

時なり。時なり。汝の時なり。

今こそ暴力の限りをつくせよ。

地角を碎け、大地を搖すれ。

嗚呼、焰よりも物凄き汝が稻妻

天地を擘き、地軸を挫き、
大海の巨濤を一時に引き上げて
木ッ葉微塵と人界を吹き流せ。
慄く人類をして、瞬く暇に
原始の壯嚴威壓のもとに
其魂をふるはしめよ。

世は金錢、地位、名譽などゝ
汚れし風に深くも浸みて
正義の力餘りに弱し。
嵐よ、大いなる時代の奔流と化して
横一文字に社會を貫ぬけ。

彼の落潮を覆へす力をこそ
今、汝に附與す。
おゝ、私も亦嵐の子供——
嵐の庭の小供である。

來れ！　誰か嵐の核心にあつて
私と共に歌ひ出す者は居ないか。

囂々たる大渦よ
吹きつのれ、なりまされ、
吼え猛ける怒の庭に……
荒れ狂ふ罪惡の最後をし殲さんまで

いざ友よ！
再び晴朗なる人心をと
祈らうではないか。

汽車の如く

汽車を見て我に勇氣漲る。
紛錯せる世上の一切を突破して
驀進、又、驀進、
雄大なる山河も悉く後(あと)に、
曠望際涯もなき大平原、
全速力、全速力、
驀進！　又、驀進！
友よ、君今如斯き心事なりや。

天よ米國を匡せ！

櫻は咲きぬ。雨に散りぬ。
此時大和心は蹂躙せられたり。
武士よ！　汝、耻かしめられて
何故に默するや。
重なる不義と不道の暴戾の
國旗の上にかゝりし時、
憤激以て當らずんば
最早何等の威信も尊貴も
あらじと思へよ！

遺憾なり、殘念なり、無念なり。
吁、幾度となく切齒の忍辱——
幾年となく天涯はるか
十萬我が同胞の如何ばかり
熱き涙に暮れたるぞ！

夢ならず！　實ぞ！　然り眞！
此壓迫！　此迫害！　此背德！
此非道理不盡の——
我が受けし彼が行動に敵對せん
心用いし我等の禮讓は
斯くて何時まであるべき乎、

忍ぶ能はず。堪ゆる能はず。
其處に何時しか頑迷固陋なる醜惡の
看よ、暴虐惡辣なる政治家は
得意の鼻蠢めかし
賣名、野望に立てるなり。
如何に酷しくも亦追放の鞭響きしぞ！
骨髓に撒して忘るゝ能はず。
此事――汝と父祖の靈とに告知せん。
再び！　おゝ、誠意ある國交望み難からん。

思へば曙の空、光に駕して
靜に開く其日の晨――

閃めく鷗の眠りの床――
夢に安けき我等が父祖の
深き長き三百餘が年の
甘し眠りや覺さん爲に
黑船錨投げし以來――
我等が眼に、我等が耳に、
新世界の光明輝やけとばかりに、
遙かの廣土に迎へたりしに、
幸ひやうやう享けなんとすれば
石もて心うてるが如し。
無情――惡漢の仕業かな。

汝が曾てプリマスの巖頭――
正義を慕ひ、自由を求め、
斯くて帆影萬里の波濤を凌ぎ、
蒼暝つゞましき祈り捧げて
新英州の淨地に生を展開きし時。
朝日遍く輝やく空、
天使は馳りて其生誕を祝し、
天なる大空の豐かな幸は
惠みと溢れ駸々として
ミソリー、ミシシツピイの流れとなり、
ナイヤガラの響と轟ろき、
ロツキイの偉靈と壯戯なりしに、

今は何等の雄渾もなく、
反つて惡の虜となる。
汝！　そも、何物の怪に憑かれしぞ！

嗟呼、米國よ！　米國よ！
アルカンザスの大平原
今は徒に空寞として
霹靂一片だにも望み難きか、
おゝ、堅忍不拔、困苦萬難を排し、
諸々の國難と戰ひ、天晴れの成功――
今日に到るまで
汝！　決して、惡魔のものならざりしに、

アメリカよ！　此狀態は何事ぞや。

あはれ、ワシントンの劍には正義の燦めき、
リンカーンの叫びには仁愛の溢れて、
ヴヰルソンの志や彌々高く、
『正義、平和よりも重し。』となし。
堂々名譽の參戰を敢行したりしに、
今其勇者何處にかある。
其墓標すらも未だ苔蒸さざるに
此亂暴果して何事ぞ！
汝は今や全く算數のものとしなりにしか。

『卑怯なり、破廉恥なり、鐵面皮なり。』と
我れウヰルソンの言葉にて大聲叱呼せんか
世界は譽げて汝の罪惡を烙印せん。

全地球の住民、其のすべての血——
此處に『生』を等しうする生命の
何等の稱呼『神』の前にか異るあらんや。
惡魔よ！　汝、假想を作るな！
隣人たらずば、皆、パリサイ人！
否、これ、サタンなり。

汝、神の前に今この罪を犯して

夫れ『我が生』を呪はんとするか、
然らば罪の結果は今に歴然たり。
嗚呼、全世界の中心は離れて其の處を替えん。

汝が蒼穹一と度び搔き亂されて暗雲漲ぎり
光りも、輝やきも、閉されなんか、
西半球、之よりして永劫の夜半たらん。
其もよし、其もよし、
我等猶ほ光明に向ひて立てば——

おゝ脈々たる血潮は
今東半球に漲ぎるなり。

この何たる悲憤の高鳴りぞや。
あゝ、人類の聲も言葉も、恐らくは、
この瞬間——
神の示現の絶大なる感動そのものより
外なからん。

聲あり、
益々高く天地を震はせて汝を呼ぶ。
アメリカよ！　アメリカよ！
汝、今、何を爲しつるぞ！
其爲政者を責め、其國民を鞭うて！
罪は汝等全體をいたくも辱かしめたり。

生を貪るアメリカ人！
陰慘たる夜はつぎ又つぎて
斯くて皆目さえも判たざるべし。

明石潟にて

朝は白帆の　島影廻り
ありし其昔　歌人偲ぶ
明石が濱の　船歌の聲

希望溢るゝ自由の身體
荒浪凌ぐ不拔の精神
空と海より正義と愛を
地に持來たす汝が使命

雄々しく起てよ！

氣高く生きよ！

夜はさゞ波　金銀鏤ばめ
夢圓(まど)らかに　磯邊に通ふ
美はし島の　日の本の國

浮薄を以て汚す勿れ
虚榮の胸をこの波に洗へ
大自然を通して囁く聲の
言葉に曰く……

「日本人よ！」と

愛國篇

我等擧(こぞ)つて日本を

クロムウエル起つて英國を、
我等擧つて日本を、
高き不滅の十字架の上に……

晨(あした)の祈り

夜は白らむ。
夜は白らむ。
　曙の空、
　靜かに、祈る。

神よ！　我國を、我國民を……
　大君の上に、豊かな幸を……

憂國の精神、胸に火！
彼方に太陽――
起て！　今日も……

世を擧げて華美、
あゝ、卑俗――
國は亡ぶ、國は亡ぶ。
我等、何ぞ、默するを得んや。

戰(いくさ)の庭に武夫(もののふ)のつとめ、
永く名譽と幸(さち)と祖國(みくに)の上にあれ。
潔(いさぎよ)き心、潔(いさぎよ)き胸、

大和の花と、花なる心よ、
大空のもとに匂ふも今日ぞ！
床しき我が日本の
心ぞ、高く、仇ならましや。

進め、同胞よ、暖かき其手を携へよ。
勇め、同胞よ、心合せよ。
榮譽の戰にぞ斯くて君が頭に、
此日冠かち得んために、
等しく其業に從ひて時代の進運に連なり。
高貴の胸につきざる『眞理』求めよ。

夜は明けぬ。夜は明け離れたり。
旭の光り、我等を、めぐる。
旭の光り、我等を、めぐる。

晨切に祈る

雲もなき冷たき大空、
凍えし大地、
霜の柱を碎く。

凛として
遠く近く
宛然深海の底にも似たるよ。

音は聞えず、
靄ひは霽れず、

洩れ漂へる微光りのみ。

おゝ、
如何なればかく、
汝、いみぢくも幕下されつる。

哀れ掲げんの手もて
眞白き富士の嶺のみぞ、
仄に眺むる。

今朝は操練の兵士も見えず、
私――たゞ一人

霜の駒澤の原頭に……

其處の眞中に生ひ立つ五本の松——
一とつは老いて綠益々濃やかに、
四つの若木ものびのびと、
我れは其の一と本によりて、
靜かなる朝の祈りをぞ捧ぐる。

神を呼び、
國民を思ひ、
國家を憂へて、
大君の上に

我が攝政の宮にと
繰るは之れ豫言者イザヤが書。

『天よ聞け、地よ耳を傾けよ。
エホバ語り給ふ。
言あり曰く……と、

然れどイスラヘルは識らず、
わが民はさとらず、
あゝ、罪を犯せる國人——』

讀み來りていつしか我眼も涙に濡れぬ。

……

愛國者よ！
今、汝の義務は何か？
國民よ？
汝等が眞に求むるは何ぞや。

國は治らず、
天下は平らかならず、
數年――尙、未だ喧しき政治論。

朝野に――
心この憂ひに滿ちたるもの
噫、果して幾人かある。

知る。
我等が眞に國を匡す者は
僅に數人なるぞ！

紀綱の紊亂、人心の頽瀆、
彼の天災力を以てしても
尙且つ償ふ所なくして、
惰眠貪るとならば、

怒つて天よ
更に大いなる淨火の焰を下せよ！

豫言者は叫びぬ。

『萬軍の神、我等に少しの遺りを
とゞめ給ふ事なくば
我等はソドムの如く
又ゴモラに同じかりしならん……と、
又、汝等ゴモラの司よ！
神の聲を聞け、
汝等ゴモラの民よ

我等の神の律法に耳を傾けよ……』と。

然り！
卑俗なる徒と其輩とを追出して
御代を邪より救ひ
斯くてぞ搖ぎなき
萬代の礎をぞ堅めなん。

我等の英雄、
我等の偉人、
苟も日本人たる者、
何ぞ愛國の至情に燃え立たざる。

起て！
起つて、汝の力を用いよ。
鶩の如き心元なき内閣、
亂雜極りなき議會——
速やかに解散瓦壞せしめん。

而して之に代るに
信義の士、眞情の友、
正節高うして菊の如き武士を
選み以て我等新に始めん。

明け渡る鷄鳴は消えぬ。
霜を射る光は放たれぬ。
いそしみ戰ひ正に酣ならんとす。

奮ひ起て！
我等が英雄、
我等が偉人、
いざ！

一九二三年　一二月　二〇日

一番汽車の中にて

茜さす空の大海よ
燻りし地平よ
穏やかに覺めなんとする
初々しき世界の胸に
奇しき今日の始まりを祝す。

おゝ、穹窿は模糊として
底知れぬ神秘を湛へ、
丹彩やかて輝やき
紅に染めぬかんとす。

霜は白し、原野は遠し、
火光——
夜は徐々として其影うするゝ……

おゝ、さゆらぐ朝風に
ゆらめく光り
曉、希望溢れ
西さして我が汽車はゆく。

幸あれ！
爾に又今日の一と日を……

神は最も豐かなる惠みを下す。

祈らまし、祈らまし、おゝ、我が胸に、
愛する日本よ！
熱血沸ぎる青年の胸、
祖國をよく泰山の安きに置かん。

車窓にうつる光の中（眩ゆし）
爾の若き勞働者等
群れて今道を急げり
おゝ、胸、情感に迫りて涙溢るゝ。

男兒！
おゝ、今起つて
爾、國を救へ！
爾——

おゝ、
國に此時に
而も何故に
偉大なる人物が出でざるぞ！

見よ！
無能極まりなき議會政治、

情實に纏はる議員選擧、
黨利私慾一片にして
常に事を誤る彼等、
兎角の軟弱不振の外交、

速やかに政治の本を匡して
國民の聲を高からしめ、
力こめて萎靡せる產業を興し、
沈滯せる空氣を破り、
經濟を確立し、

かくして大入超の影響を防ぎ、
不安を一掃せよ。

嚴たる偉容と、侵し得ざる尊嚴と、
赤誠こゝに傾けて、
公私に同胞(とも)よ顯然として
覺醒革新の氣運を作れよ！

義務は命(いのち)なり。
權利は力なり。

之を守れ、

之を失ふ勿れ。

一歩も尺寸も、
一刻も一秒も、

終始この崇高なる
觀念を離れて生きざれ。

我れ爾に告げん、
敢て言はん。

車窓には、鋤、手にかへす

勤勉な農夫、
彼方にはきはやかに晴れし富士、
天際に聳ゆる。

一九二四、一、一〇、神戸行の列車中にて

鐵火の歌

神よ、我等を守れかし、
正義を紊る人道の敵、
劒を拂つて武士よ起て、
國旗はさやぐ朝の風。

敵に耻辱の降りかゝれ、
我等死すとも名譽得ん。
祖國を思ふ熱烈の
愛か、涙か、流るゝを。

進め、喇叭の響くなり。
軍鼓は鳴りぬ。血は沸きぬ。
萬軍こゝに戰ひぬ。
勝利の旗を靡かせて敵を弔ふ夕戰場。

夕陽に紅く血に染みて、
肅とし心、祈るかな、
光榮神に、平和地に、
惠みの世たれ君が代と。

新日本の歌

英雄出でゝ
風雲湧き起れ
亞細亞の天地に
新らしき我が日本！

悲運重なり懸りて重大なる時
汝等――勇者
擧(こぞ)れ！　忍びて待たん。
いつかは匂ふ大和櫻。

父祖よ！　この墳墓の地――
歴史を汚す賊を神共に許さじ、
おゝ、脈々たる血潮ぞ沸ぎる愛國の胸、
夫等――醜き爭鬪の禍根を斷たん。

望めば亞細亞の大陸――
日出づる八島。
躍りつゝ歌ふ我等の讃美を、
太平洋上遠く響かしめん。

護國の歌

輝やく日の國
我等は日本人なるぞ、
廣き海は周りに高鳴り、
永遠(とこしへ)に自由の調べを奏づる。

心は……富士の如く、
咲き匂ふ櫻の花にも似たり。
若き生命、血潮に燃ゆ。
正義と愛、進め！

國運かけて双肩にあり。
尊き義務に捧げし此身、
力あはせて今ぞ爲さん。
祖國よ光榮の冕(かんむり)うけよ。

祖先も神も我等と共に、
我國護る。我國獲る。
我國今や泰山の如し。
君が代永久(とは)に動かず變らじ。

尊き義務——自ら勉め勵むあらゆる勤務

愛國の歌

響け、鐘よ！
破れ、惰眠！
永久に國民を
呼び醒まさん。

昔、誇りし
大和心、
今見よ
妖しき風に散る。

許すな、同胞よ
此時ぞ！
汝が危機を
乘切らん。

起て！　青年よ、
勇者たれ！
國家は汝に
委ねたり。

思ひ驕らず
胸靜か、

光榮ある義務、
我が生命。

守れ、御神よ
我國を、
我が、大君を
御位を、

意氣と血潮の
彩りて、
國旗こゝに
閃めけり。

進めや進め、
我が同胞よ！
迎へし時代の
大潮を。

荒浪今は
うつとても、
我等巖の
如くなり。

荒浪今は
うつとても、
我等巖の
如くなり。

大正十二年五月、風教絶下の時に之を作る。

我が大君に捧ぐるの歌

第一章　文の精神
第二章　武の精神
第三章　日本國民の理想の象徴
第四章　祖國に捧ぐる我等の祈禱
第五章　正義人道の高唱
第六章　博愛、光明、一致協力して新日本建設の爲に
第七章　國威の宣揚、大和民族の雄飛、世界永遠の平和の爲に
第八章　「君が代」萬歳

我が大君に捧ぐるの歌

第一章

咲け、櫻よ、春の日に
燃ゆる大和民族の
高き誇りの赤心と

第二章

散れ、櫻よ、そよ風に
ヒラ、ヒラ、ヒラと舞ひ乍ら
歌へ汝の武士を

第三章

見よ、蒼穹に霞立ち
彼方の松の色榮えて
遙か、遙かに、懸る富士

第四章

嗚呼、萬民に幸あれと
我等いたゞく、大君の
此世に『神』の惠みあれ

第五章

畏し、君よ、我が同胞よ
平和の波の寄する岸
正義を昇る太陽の如く

第六章

光の心、愛の聲
今こそ勵め諸共に
力つくして國の爲め

第七章

此處より揚れ日の御旗
靡け永遠の春風に
御代の行末も極みなく

第八章

萬歳、萬歳、君が代は
千代に、八千代に、さゞれ石の
巖となりて苔のむすまで

—了—

我が前に太陽はおどり
大海は巨濤をあげて歌ふ
輝やく空にみどりの地
我れ日本に生れ出でたり

目次

「震災篇」
鋸山下にて　九篇……一
上京して　十篇……二六
其日の東京……三八
心こめて此一篇を市民に捧ぐ……四九
附　火事之詩　四篇……五九

「自然篇」
幻の國に……七九
夕暮の散歩に……八〇
夕暮の渚に……八三
海はさみしくはてしなし……九〇

太陽はやがて昇らんとす……九一
法花村にて……九四
秋和の里に……九六
はねつるべの音……九九
たそがれの山に……一〇〇
虫の音……一〇二
緑葉の影に……一〇四
車窓によりて……一〇五
大崎のプリッチを歩みつゝ……一〇六
寒夜に叙す……一〇八
嵐の前の平原……一一一
乾坤一擲……一一二

「親しき友へ」

大詩人がほしいのよ……一一五
昔、昔、エス様は……一一六
星のまたゝき……一一八
可愛いゝ御嬢ちゃん……一二〇
勝利を高く謳ふまで……一二一
政子ちゃん……一二四
清水さんの御子様方に……一二六
愛らしき子等よ……一二七
おゝ、胸、突き刺さるゝばかりだ……一二九
いとし子を失はれしH兄に……一三一
勸誘の歸りに……一三五
チャンチャンコ……一三六
戰に勝つか、負くるとも……一三七
三田山上に獨立の……一三九

夕凪の濱に……一四〇
澄める心のどんなにか……一四二
門出の歌……一四三
海軍飛行機……一四五
休める海軍機……一四六
燈臺……一四七
明星……一四九
コチ、コチ、時計……一五〇
ピエロのS君……一五三
齒醫者の卵子……一五五
「人は自然の寵兒よ」と……一五八
波のくすゝ、海岸に……一六〇
せゝらぎよ……一六一

「戀愛篇」

涼しき葉影に……一六三
川べりの夜を……一六四
夜半の三溪園に……一六六
「斷崖、斷崖、斷崖」……一七〇
捨て、行け私共を……一七一
愛はいらぬ……一七四
往けよ……一七五
坊やよ……一七五
苦闘し歩む……一七七
千載の一遇……一八〇
敕の榮冠……一八一
今に……一八二

聲限り歌へ……一八八
夜更けの街に……一八九
ねえ、誰か來ないの……一九三
靜かなる淸に……一九五
女性に……一九六
運命は實に深く刻む……二〇一
自暴、自棄……二〇三
捨鉢の人生……二〇三
淨火……二〇四
夕陽に賦す……二〇五
噴火山……二〇九
獨り敢然として進み往け……二一一
飛行機に寄す……二一三
諸共に愛の花を咲かせまゝ……二一五

續、四篇

「警世篇」

白晝の幽靈……二一七
Y裁判所にて　三篇……二一八
寢坊助齒醫者……二二一
飛だ御稽古……二二四
世界的傳道者「S・K」に……二二七
復活節に……二二一
T敎會員に……二二一
惡魔となつて……二二三
皆な眠れ……二二四
もつと惰眠を貪れ……二二五
宗敎臭きは大嫌ひだ……二二六
世の不義と戰つて……二二七

何も案ずるものはない……二三八
死線を突破して……二三九
我等の本領……二四〇
悲痛、絶望……二四一
海角の斷崖に臨んで……二四二
激涙に詠ず……二四三
端的に打出せ……二四四
ア、、立派な紳士……二四五
暗き呼聲……二四七
歡樂の悲哀……二四八
アイスクリームとビール……二四九
主を仰がんの心よ……二五〇
おゝ、我が日消ゆるよ……二五一
嵐に賦す……二五二

汽車の如く……二五九
「天よ、米國を匡せ！」……二六〇
明石潟にて……二七一

「愛國篇」

我等擧つて日本を……二七三
晨の祈り……二七四
晨切に祈る……二七八
一番汽車の中にて……二八八
鐵火の歌……二九六
新日本の歌……二九八
護國の歌……三〇〇
愛國の歌……三〇二
我が大君に捧ぐるの歌……三〇七

跋

平塚凌之助

序文　佐藤甚治郎
跋文　平塚凌之助
小照　自序
裝幀　著者

君に寄す

働き歌へ　働き歌へ
汝勇壯なる詩人商人
燃へよ沸けよ　燃へよ沸けよ
歌ひつ常に苦勞せよ

なれの正しき汗を見て
なれの床しき歌聞きて
悲しむ人も元氣出し
再び起つて進むべし

なれが歌皆力なり
眞夏の夕立降る如く
汚れし汗の顏洗ひ
惠みの光輝(ひかり)注がなむ

なが歌なしも予は愛す
そは我が神の贈り物
天來の聲ほがらかに
世の煩ひを和らげん

ブランド的な日本詩人！
なれの善き業とぐるため
嵐や　雪や　雨凌ぎ
汽車の如くにいざ走れ

平塚

To Hori

Work and chant work and chant
O you brave bard merchant!
Burn and boil, burn and boil
Forever singing toil!

Seeing your honest sweat
Hearing your song so sweet
Sad people will take heart
And stand once more to start.

All your songs are power
And like summer shower
They'll wash the dirty face
And make it shine with grace.

Such is the rhyme I love
As a gift from above
A heavenly voice so clear
That soothes the worldly care.

Brand-like bard of Japan
Your best works to have done
Go rushing like a train
Thro' the storm, snow and rain!

Hiratsuka.

米は吾々日本人にとつてはヴアイタル・マンナである。即ち大和魂をはぐくむ爲に無限の精力と天妙の香味を貯へた無類の糧である。そして昔より今日に到る迄よく大和民族を養ひ、成長せしめ、進展させた。米を外にして日本人に眞の生活がないと同樣、大和魂と瑞穗を忘れて日本國民の發展は望まれない。日本米を食ひ飽きたと云つて、外國米のみで生存せんとしたら、恐らく榮養不良、神經衰弱となつて健康を失ふだらう。米一粒の中には太陽の光りと、熱と、露と、ヴイータミンが含まれてあり、自然の法則が完全に働いてゐるから、心して嚙みしめれば嚙しめる程、云ひ難い美味を味はせてくれる。その味は即ち大和魂であつて、米を常食とせざる他國人の知る所ではない。日本人と雖もよく嚙まざる者は、本當の美味を辨へる事が出來ないのみか、其結果は先づ消化不良に終らう。吾々は瑞穗國の民として、辛くも現在の所は、米にさほどの不自由を感じてゐないが、外米の輸入は年々增加しつゝあるではないか。その上日本の青年は益々農業を蔑視して行く傾向がある。

一方純然たる國民思想を養ふべき靈の糧も亦缺乏して、外米的思想輸入超過の結果、大和魂は可成りエネルギーを削がれてはゐないだらうか。世界の文明國に伍して、あら

ゆる文明の利器を備へ乍らも、日本には未だ大和魂を發揚させ得る純粹の日本詩人と、世界的人類の指導者が生れ出てゐないと云ふ事は、不思議な力を含む米の產地である日本として恥ずべき事である。

詩人と名乘る者は多く居るが、愛國者、憂國の士、宗敎的色彩の濃厚にして、よく大和民族を奮ひ起たせ、前進せしめる、モーゼの如き詩人や指導者は殆んど居ない。それは滋養豐富な玄米を作る農夫が乏しいのと同じことだ。

玆に一人病的時代精神（ツワイトガイスト）の中に、寡々しく雲を凌いで立ち、永い間、默々寡言、よく働き、よく人々を慰め力づけ、諫むべき詩を作ることを怠らなかつた隱れた詩人がゐる。即ち本書の著者堀博隆氏その人である。

一粒の米が、かくも尊い精分を秘藏する迄には、季節の變化と永い月日を經ねばならぬ。噴火山的性格を有する彼に、詩の爆發を見る迄には、之又永い準備として、樣々の經驗がなくてはならなかつた。

彼は曾つて噴火したことのある死火山ではない。今尙活動せる淺間の如く噴煙高く冲天に注いでゐる。彼は信仰より生ずる精力、根氣、永續を以て眞劍に自己を忘れて詩を

作つた。「大君に捧ぐるの歌」は、實に彼が七年間の抱負であつたと云ふ一事に付いて考へてみても、どれ丈彼が國を愛し、民を愛し、使命を感じて筆を執つたかが分からう。

彼の詩には一風變つた旋律とリズムがある。そして言葉はスパルタ的で、力づよく、「眞理を表はす言葉は單純」(ヴェリタチス・シンプレックス・オラチオ・エスト)なることをよく示し、ブローニングの云ふた「あらゆる詩は、無限なるものを有限なるもの丶中に入れる事」を卒直に實行してゐる。

「美は眞理、眞理は美。」「人の煩ひを和らげ、思想を高めるものが詩である。」と唱へ得る、キーツやテニスンの如き、美と眞理に主きを置く詩人も、日本に欲しいが、然し受寶醜譯的思想には勿論力がない。個性(大和魂)を發揮したスパンテニアスな詩を作り得る純日本詩人が欲しい。所がブローニング的指導者として魂の發展の爲に、全力を注ぐ詩人は殆んど日本にはゐない。私は常に日本のブローニングの出現を望み祈つてゐた。

何故ブローニング詩人の詩は力であり、又彼の詩が難解であるかと云へば、彼は宗教的樂天家であつて、總ての矮的問題を宗教的に解決し、彼獨特の格調を以つて表現するからである。故に信仰を度外視した不信者には理解しがたい。歐米の文學の精髓をなす、即ちメロディーとアンダーカレントとは、正に詩歌であつて、それがどの位人心に影響

を及ぼしてゐるかは、吾人のよく窺ふことの出來る事實である。

VITA SINE LITTERIS MORS EST. と理よし、詩歌を外にした學問及び生活は死也とは……

詩歌も音樂と等しく宗教—神—に源を發してゐる。故にそこから眞と美と力とが泉の如く湧き出るのである。

彼等大詩人は云ふまでもなく、生れ乍らにしてサムソンの如く、「神のナザレ人」として、其使命を感じ、あらゆる苦闘に直面し得る力强い魂を授けられてゐる。

詩作する人は多い。然し「呼ばる者は多しと雖も、選ばるゝ者は少ない。」のである。故に立派な滋養本位の稻穗を結び、衆生を愛する純粹の日本詩人は少ない。

堀氏は愛の源を裡に有してゐる。彼には信仰があり、豊かな體驗がある。そして强い彼が信仰の力は、彼をして見へざる新世界指して驀進せしむべく、コロンブスの如く、或はアフリカの蕃地に單身乘り込んだりヴインゲストンの如き、强壯なる身心を、病弱と悲痛絶望の試練を經て彼に惠んだ。それ故に彼の歌には力がある。彼の信仰は即ち靈の糧であり、彼の健康を維持する純眞なる大和玄米である。

強壯であればこそ彼は活動家であつて、饒舌、駄辯、爭論を弄せず、着々愛の爲に身命を賭して働く實行家であるから、理論によらずして早く結論をグラスプする近道を知つてゐる。而して愛の果實を手づから取り、食らひ味ふて人にもその方法を薦めるのである。

彼の詩にはシューベルト的な柔かな旋律はなく、力（パワー）を現出し、神の聲を傳へるベートーヴェンの樣な壯嚴なメロデイーがあり、凸凹せる巨岩絶壁の如き男性美を豐かに發揮してゐる。

彼は英詩を繙かず、又ブローニングの研究者ではないけれども、宗教的詩人に共通な力と希望に燃え立てゐる。そして彼自らが「談々燃ゆる焰」であり、「噴火山」であることを自覺してゐる丈に、ブローニングより更に力の點に於て秀越してゐると私は信ずる。

何ものも我に近づかしめず
我は談々燃ゆる焰なり
おゝ我れ燃へに燃へて
焦るゝ神に見（まみ）えんまで

靈よ、肉よ、困苦悲痛に
血潮榮ゆる火花を散らせ

如斯噴火的詩句はこの詩集の隨所に見られ、又讀む人をして、ゴッホの太陽の如きを思ひ浮ばしむるものがあらう。

實に彼は信仰の力によつて書く、そして詩には不向な日本語を巧みに生かし操縱してよく BEST WORDS IN BEST ORDER に當嵌めてゐる。

センチメンタルで柔弱な青年男女は、彼の戀愛篇を讀んで物足らなく思ふかも知れないが、彼は戀愛を享樂せんとしたドンファン形の詩人ではない。否、彼は失戀の際に於ても、未練なくキッパリと諦め、怨恨も猜疑もなく、只管自分を棄て去つた女性の爲に祈り、ブローニングのクリスチナの結論に見る如く、「彼女我を失へり、我れ彼女を得たり。」と叫び得た。若し彼に信仰がなかつたなら、恐らくこの試練に耐へ切れず、遂にはピポンコンドルに陷つたであらう。然るに失戀の苦惱の中にも、

進まんか救の榮冠
退けば永遠暗黑の死

進め！　生命を捨てゝ……

と叫呼ぶ事が出來、其最も力強い「夕陽に賦す」の詩篇を殘した。誠に小人を盲目ならしむるものは少さな愛である。けれど健全なる精神を有する彼は、自分の傷手をも忘れて人々の爲に歌ひ出したのである。さればこそ「詩人は或は益し、或は喜ばさんと欲する者である。」と云へやう。

彼の詩句は簡潔にして難解なるものもあるが、ペダンチックでなく、いと敬虔な彼は、實に純日本的な詩を書く、故に反覆讀誦すれば、云ひ難い日本米の美味を嚙み味ふ事が出來、彼の詩を通じて無限なる神の愛を受けやう。

畏くも日本人にして、良心にマグネットを有する者なれば、彼の詩、即ち電線に觸れるならば、直ちに強い電流を受け、感應することが出來る筈である。

人間の生活及職業は、魂の發展の爲であつて、正に意義がある。思索、煩悶、苦痛、迷ひ、救ひ、幸福、永遠の生命は、畢竟するに靈に詰るものであるから、試練と病苦を潜りぬけ魂の健康を惠まれた人は、光りに包まれた月の如く美しくなる。

魂の健康を增進せしめる愛の力―眞理―を與へるものは、詩に流れる神の電流であり、

光線であつて、その尊い電線の製作者が選ばれたる詩人である。

私は彼の詩に接してとめどなき喜悅に心は躍り、日本にも如斯立派な活動的詩人愛の實行家が確在することを知つて、彼を歎賞せざるを得ない。そして一日も早く彼の詩集が世に現はれて、より廣い場面に渡り、惰眠を貪り、或は迷路に彷徨する、ニヒリスト的青年の魂を、泥濘より救ひ出さんことを祈つてゐた。

信なる神は彼の努力を空しくせず、遂に「噴火」をして、世に爆發せしめ給ひし事を知つて、私は感涙に咽ぶ。

オ、幸にもこの詩集を繙く兄弟姉妹よ、喜べ、誇れ、これぞ私達の純粹の日本米である。嚙しめろ、良く味へ！　さらば天妙の味に醉はされん。

一九二六年　紀元節

小石川區竹町にて

平塚凌之助

大正十五年十一月五日印刷
大正十五年十一月十日發行

版權所有

噴火　定價壹圓五拾錢

著作者　堀博隆

發行者　堀博隆
東京市神田區三河町二丁目九番地大和屋内

印刷者　高橋竹治
東京市日本橋區濱町二丁目十二番地

發行所　愛光商會
東京市神田區三河町二丁目九番地
大和屋(電話、神田、二五三八)内
振替東京七四八五九番

550
127

終